

## 農地へのサルの侵入を防ぐために

### 1 はじめに

長野県におけるニホンザル（以下、サルという）による農林業被害は、過去5年間、毎年1億5千万円を超え、その7割以上を農業被害が占めています。このため、本県では鳥獣保護法に基づく特定鳥獣保護管理計画を策定し、地域ごとの被害に対応した被害対策を進めています。

本来サルは平地を好む動物であり、人から逃げないように山で暮らしてきました。しかし近年里山や、農地での人の活動が減少したで、サルが集落周辺にでやすい条件ができ、被害が大きくなってきました。

今回は、森林総研、宇都宮大学、日本獣医生命科学大学などと協力して検討を進めている加害初期の群れを対象とした農地周辺を含めた管理と、効果的な追跡を組み合わせた被害対策について紹介します。

### 2 サルと農地

サルの群れは、メスを中心として日中に一定の行動域内を移動しながら生活しています。その一日の生活の中心は食べることで、行動域内の餌がある箇所に執着します。農地には、農作物という栄養価の高い餌とともに、「あぜ草」などの餌もあります。

行動域内の人がいらない農地は、餌がとりやすく非常に魅力的な場所で、手入れがされずヤブが繁茂した森林は、もし人が来てもすぐに逃げ込めるために、農地に執着するサルにとって格好の隠れ場所となります。

### 3 サルがいやがる環境整備

#### （1）農地周辺の見通しをよくする

現在、県内各地で進められている農地に隣接する森林の緩衝帯整備は、除間伐や刈り払いを行うことで、隠れ場所となるヤブを取り除くもので、農地周辺の環境をサルが好まない環境に変えていくことを狙いとしています。

飯田市北方では、果樹園に隣接する森林を約30m巾で伐採し、隣り合わせたヤブも併せて刈り払ったところ（図-1）、伐採前までは、果樹園周

辺を頻繁に利用していた群れが、農地から離れた森林に移動し、約11ヶ月間農地周囲に接近しなかったことが、発信機を使った調査で確認されました。



図-1 飯田市北方の環境変化（伐採状況）

安曇野市穂高では、群れの行動域内を縦断する道路の農地側のアカマツ林内でヤブの刈り払いを行ったところ、群れが道路を横断してくることが減少しました。

これらのことから、農地周辺の見通しを改善することが、サルに対する心理的障壁になり、農地への接近が減少したと考えられました。

#### （2）農地を侵入しにくくする

農地周辺をサルが近づきにくい環境にしても、農地そのものが入りやすければ意味がありません。そこで、サルが侵入しにくい農地に変えるため、「防護柵の設置」と「追い払い」を組み合わせた侵入防止策を検討しました。奈良県果樹振興センターで考案された「猿落君型簡易柵」（高さ2.7m）を、人家からみえる農地（0.02ha）2箇所に設置しました。そして、サルが農地周辺に侵入してきたら、ロケット花火などで威嚇し、農地からサルを追い払いました。

特定の個体の柵内への侵入がみられたものの、侵入箇所を確認して改善したことで、その個体も侵入できなくなり、数年ぶりに作物が収穫され、防護柵設置の侵入防止効果が認められました。

これらのことから、農地周辺の環境整備でサルの被害を軽減するには、図-2に示したように、手入れが不十分な集落周辺森林の除間伐やヤブなどの刈り払いの手入れを進めて、見通しがよく、隠れ場

所がない環境にするとともに、防護柵を設置しサルが侵入しにくい場所にしていけることが必要といえます。

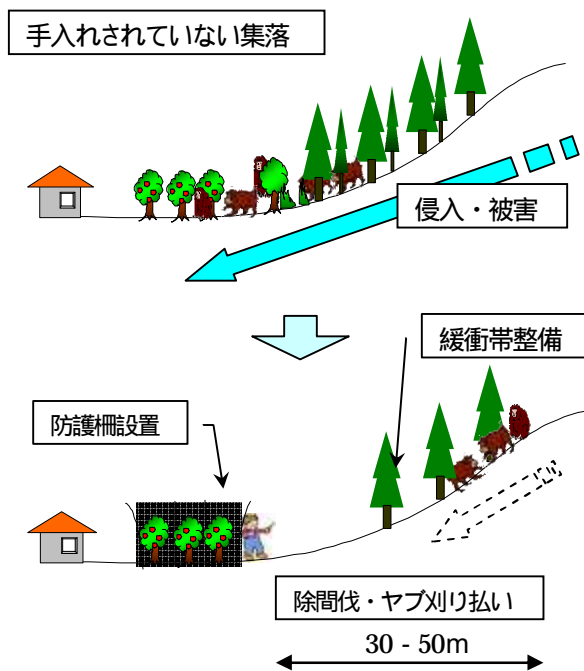


図-2 集落の環境整備の例

#### 4 群れを農地から追い返す

農地に接近しにくい環境を作り出しても、農地にはおいしい餌があるため、群れは執着します。これまでも群れを追い払っても、人がいなくなるとすぐに群れが農地に戻ってくる例がありました。これは、農地から追い払われた群れが、林縁などのヤブに隠れていて人がいなくなると戻ってきているためでした。

そのため、群れを強制的に移動させ、農地周辺から引き離すため、どこまで追えば農地に戻りにくくなるかを「追い上げ試験」により検討しました。試験は、農地周辺の除間伐など環境整備と防護柵を設置した農地に現れた群れを、人が威嚇しながら追跡して排除する方法で行いました。

農地にでてきたサルを700mほど離れた森林の奥までずっと威嚇しながら追跡すると、その群れは2週間同一の農地に戻りませんでした。また移動経路を解析してみると、追い上げ前は山麓の森林内にいることが多かったのですが、追い上げ後は人目につかない上部の森林へ移動していました。

その後も地元住民による追い上げが行われ、農

地に近づいても農地に現れなかったり、人がでてくるとすぐに逃走するなど、農地に出て行くことへの恐怖感が増したらしく、群れの出現頻度が低下してきました。

群れを農地から排除するためには、森林内まで追跡していくことが必要と判断されました。

群れを追跡し追い上げる際の注意点としては、以下のことがあげられます。

- ・ 群れの端から威嚇し群れを分散させずに移動させる。
- ・ 追跡はゆっくりと急がずに、群れとの距離を歩いて縮めるようにする。
- ・ 群れが止まったらロケット花火などで威嚇し、繰り返しストレスを与えて群れを安心させない。
- ・ 群れの移動方向を変える場合は複数で追い上げ、誰かが先回りして方向を変える。

このような方法で30頭程度の群れならば、1人から数人で追い上げられますが、100頭を越えるような群れは、サルが大きく広がるため、多人数で配置を考えて誘導して追い上げることが必要になります。

#### 5 おわりに

サルによる被害を防ぐには、サルが侵入しにくい農地周辺環境の管理を進めるとともに、常にサルを地域ぐるみで排除することが重要です。現在県内各地で進められている里山の刈払いや除間伐による緩衝帯整備は、農地周辺の見通しをよくして、動物が嫌がる環境を作り出すとともに、日中に動き追いつけが可能なサルの対策では、追い払われた群れの隠れ場所をなくす点や、サルを森林内まで人が簡単に歩いて追跡できる点でも有効です。

大町市などで行われているモンキードックによる追い上げも、人が追えないところまで犬に追いかけることで、農地から積極的にサルを排除することができているそうです。

また、農地周辺の管理として、廃棄作物や被害を受けた作物も片づけることも、農地周辺での「無意識の餌付け」を防ぐために重要です。

しかし、サルは農地にしつこく執着してやってきます。地域住民が、サルを農地にいれない、追い払うという強い気持ちを持って、あきらめずに粘り強くどんどんサルが嫌がることを続けていくことが大切です。

(育林部 岡田充弘)